

蟻を殺す

作 斜田 章大

登場人物

少女 海ちゃんと呼ばれている。小学三年生。少し大人びて見えてもいい。

女 少女の担任教師。柔らかな物腰。さっぱりとした教師らしい格好だが、例えば爪
だとかちよつとしたところにさりげなく女性らしいお洒落を感じられる衣装だと
良い。

あらすじ

舞台は小学校。その校庭である。

図工の授業を抜け出して、少女が一人、校庭の蟻を踏み殺して時間を潰している。
そこに一人の女が現れる。少女の担任教師だ。

しかし、どうも様子がおかしい。

授業に連れ戻そうとする気配がない。校庭のベンチに座って日向ぼっこをしている。
温和な笑みをたたえカバンからチョコレートを取り出し、少女に勧める。

二人の年齢の離れた女二人を、太陽はじっと照らしている。
地面には無数の蟻が、ただ、蠢いている。

蟻を殺す

夏である。

蝉の鳴き声は聞こえない。代わりに聞こえるのは、子供達の声。うっすらと。注意して耳を傾ければ、何かスポーツをしている声だと分かる。

たまに車の通り過ぎる音や、犬が吠える音等が聞こえてもいい。聞こえなくてもいい。

少女 ……

少女が一人。その喧騒から離れたところにぽつんと立っている。

小学校の校庭。体育館の裏。

上手側にはどうやら校舎があるらしい。

下手にはちょこんと、寂れたベンチ。木製。ペンキはかなり剥げている。

少女 ……

少女は俯いているが、暗いイメージはない。

よく見れば、それは俯いているのではなく、慎重に熱い地面を見つめているのだと分かる。素早く地面に目を走らせ、何かを探している。

唐突に、

少女は地面にある何かを踏みつける。

鋭い音が舞台には響くだろう。

彼女は、地に靴底をつけたまま踏みにじる。

ゆっくりと足を退け、彼女に踏まれた何かの、残骸をほんの少しだけ満足そうに見つめる。

そしてまた、熱い地面に目を走らせる。

再び強く、地面を踏む。踏みにじる。

地団太でも踏むかのように、同じ場所を何度も踏みつけることもあるだろう。

そこに一人の女が通りかかる。

二〇代にも三〇代にも四〇代にも見える女だ。温和な雰囲気。

優しい笑みを浮かべ、彼女は少女に話しかける。

女

海^{うみ}ちゃん、

少女 ……

少女は女に気付き、振り返る。
睨みつけているようにも見える。

女 海ちゃん、一人？

少女 ……

女 (笑って) 先生もね、一人

少女 ……

女 今日はいい天気ですねえ

少女 (苛立たしさを隠すように) ……いいの？

女 何がです？

少女 授業

女 図工は犬養先生ですから

少女 そうじゃなくて

女 まあ…サボりたくなる時もありますよね

少女は何も答えない。

女　　こんななにいとお天気なんですし

少女は何も答ええない。

女　　ここ、いい場所ですよ。教室からは体育館が影になって見えないし。体育館はほら、こちら側に窓ないから見つからないし。先生もね、こっそりここで、たまにぼおーっとしているんです。あ、チョコレート食べます？

少女は何も答ええない。

女　　ほんとはいけないんですけどね。他の先生には内緒ですよ？

女は温和な笑みをたたえながら、少女にチョコレートを差し出す。角砂糖くらいの大きさで個包装された小さなチョコレートだ。

少女はそれを睨みつけ、ようやく口を開く。

少女　　………いらない

女　　あれ、好きでしたよね？　チョコレート

少女　　（急に。怒鳴るように）誰に聞いたの！？

女 ……真美ちゃんだったかな。それとも陽菜ちゃんだったかな。(笑って、)でも、

好きでしたよねチョコレート

少女 ……

少女は何も答えない。また地面を睨みつける。

ふいに、何かを踏みつけ、踏みにじる。

女 海ちゃん、何してるの？

少女 ……蟻殺してる

女 蟻、ですか

少女 蟻、殺してる

女 ……

少女 ……

女 どうして、蟻を殺しているんですか？

少女 蟻だから

女 蟻だから？

少女 蟻は殺してもいいでしょ

女 ……

少女 先生も殺したことがあるでしょ？ 蟻
女 …… 踏んじやったことくらいはありますけど
少女 そうじゃなくて

少女はまだ執拗に蟻を踏みつけている。
遠くからは子供たちの楽しそうな声が聞こえる。
少女はしゃがみこみ、自らの指で、蟻を地面に押し付け、殺す。
その残骸を女に見せつけるように、指を差し出す。
女の目前に。

少女 蟻、殺した事、無いの？

女 …… 無いですね

少女 嘘でしょ

女 嘘じゃないですよ？

女はポケットからハンカチを取り出し、少女に差し出す。
少女は、こちらは受け取り、蟻を殺した指を拭く。

少女 信じられない。蟻も殺したことないなんて

女 ……

少女 ふつう殺すでしょ。蟻はさ。テントウムシとかダンゴムシとかゴキブリは殺さな

くても、蟻は殺すでしょ。蟻は

女 そうですねえ

少女 ……

女 そうかもしれないですね

少女 ……

喧騒がうっすらと聞こえる。

少女 私、先生のこと嫌い

女 あら

少女 嫌い

女 私は海ちゃんのこと好きなんですけどね

少女 ……先生は嫌いな人とかいないの？

女 うーん…人を嫌いになれないんですよね、私

少女 そういうこと言う人も嫌い

女 そうですねえ。気持ちは分かります

少女 ほんとにいないの？ 嫌いな人

女 全くいないわけではないんですけどね？

少女 じゃあ誰？

女 誰というか……人に迷惑をかけたリ、人を、悲しませたりする人のことは苦手ですけど……

少女 ……

女 でも、そういう人だって何か事情があってしているわけですからね。一概に嫌いというのも、

少女 じゃあ好きな人は？

女 だいたいみんな好きですよ？

少女 特にはないの？

女 そうですねぇ、よく笑う人が好きですね

少女 ……

女 海ちゃんも、もっと笑ったら、もっともっと可愛いって思いますよ？

少女 ……

女 海ちゃん最近笑ってくれないから

少女 ……

女 やっぱ……シロちゃんの事件のことが気がりですか？

少女 ……

女 海ちゃん、いっぱいお世話してくれてましたもんね。毎朝、一番にウサギ小屋の鍵を取りに来て……一生懸命、人参を食べる姿が可愛いって言ってましたよね。先生見てましたよ

少女 ……

女 不審者が夜中に入り込んだんです。怖いですよ。不安ですよ。でも、大丈夫ですよ。海ちゃんには先生がついてます。……先生は海ちゃんの味方ですよ

少女 ……

女 チョコ、食べます？

少女 だからいらないうて

女 そうですか

少女 ……

女はチョコレートを一つ取り出し、食べ始める。

とても幸せそうに。

女 おいしいです

少女 ……

女 甘いものっていいですよね。幸せな気持ちになれます。優しい気持ちになれます。私ね、みんなが甘いものを食べたなら、みんなが平和なんじゃないかって思ってるんですけど

少女 甘いものの食べすぎはよくないと思うけど

女 そうですか？

少女 甘いもの食べすぎると、太るし、虫歯になるし

女 そうですねー、そういう考え方もありますね

女はベンチに腰掛けると、今度は水筒をとりだす。

コップに注ぎ、一口、飲む。のんびりと。

女 紅茶です。冷たい。ミルクのたっぷり入った。飲みますか？

少女 いい

女 こないいい天気で、お天道様の下で紅茶飲んでいると、なんだかピクニックに来てるみたいですねー

少女 ……先生、やっぱり変だよ

女 あら

少女 生徒にも敬語だし

女 みんなにね、敬意を持って接したいと思っていました

少女 他の先生は空き時間まで生徒に構わないし
女 そうですか？
少女 他の先生は、空き時間は職員室にこもってるか……（ちらりと遠くをみる）
女 （少女の視線の先を見て）ああ、西門警備隊の人達ですね
少女 警備隊？
女 ああ、ごめんなさいね。……先生の間で言われているんです。冗談で。警備隊つ
少女 て。ほらあそこに集まるでしょ？ 昼休みになると
女 ……
少女 私は感心しないですけどね。タバコは
少女 へえ、タバコは嫌いなんだ
女 そうですね、タバコは嫌いですね
少女 ……へえ
女 まあ、敷地内で吸っちゃいけないから、あそこで吸うしか無いんだけど
少女 ……
女 あ、知ってました？ それでも去年まではこっそりこの辺で吸っている人もいた
んですよ。でも、今年は教頭先生が熱心に取り組んでくれたおかげで、校内で吸
う人はいなくなりましたね
少女 あれ、教頭先生も吸ってなかったっけ
女 去年は吸っていましたね。今年から禁煙始めてくれたんです

少女 ……先生ってさ、教頭先生と仲いいよね
女 あら、そう見えますか？
少女 よく話してるの見る気がする
女 ああ……よく相談乗らせていただいているんです。教頭先生、熱心な人ですか
少女 ……性別が違って、年の離れた先生の意見も聞きたいとおっしゃって
少女 ……タバコといえば……最近、イヌちゃんがタバコやめたね
女 イヌちゃん？
少女 ……
女 ああ、犬養先生ですか？
少女 うん
女 いいことですね
少女 知らなかった？
女 禁煙のことですか？
少女 ううん。イヌちゃんって呼ばれてること
女 知らなかったです。可愛いあだ名ですね
少女 そっか
少女 でも先生らしい呼ばれ方ですよ。犬養先生、可愛らしいところあるから
少女 ……最近、パパもね、タバコやめたの
女 あら、それはいいことですね

少女 私は、タバコの匂い嫌いじゃなかったんだけどな

女 そうですか

少女 私は、タバコの匂い嫌いじゃなかったんだけど

女 それは寂しいですね

少女 ねえ先生

女 なんですか？

少女 本当に蟻殺したことはないの？

女 ないですよ？

少女 ……へえー

女 はい

少女 信じられない

少女はまたじっと地面を見つめる。

蟻を見つけ、踏みつけ、踏みにじる。殺す。

それを何度も何度も繰り返す。

少女 いろんなね、殺し方をしたことあるよ。蟻のね。踏んだり、バラバラにしたり、

水を流し込んだり、火をつけたこともある

女 （急に叫んで）それはいけません！

少女 え

女が少女の手を取る。心配し、焦っているように見える。

女 火を使うのは駄目ですよ！ 火傷したら大変です！ 次にやるときは必ず、先生

やお父さんのいるところにしてくださいね

少女はそんな女を睨みつける。手を振り払う。

しばらく二人は見つめあっている。

女は微笑んでいる。

少女は険しい表情のままだ。

ふいに、

少女 ……この前ね、本、読んだの。図書館で。蟻の本。もったいい殺し方はないかな

って。蟻のね、本読んだの。先生、サムライアリって知ってる？

女 ……いえ。蟻の種類かなにかですか？

少女 うん。日本に昔からいる蟻なんだけどね。凄いんだよ、サムライアリ。顎が凄く大きくて、他の蟻を襲うのに便利なんだけど、大きすぎて自分では食べ物も食べられない変わった蟻。他の蟻の巣を乗っ取って、その蟻の巣の蟻を奴隷にしちゃ

うの。それで、その奴隷たちに食べ物を持ってもらって、食べさせてもらって、自分たちはなーんにもしない。そんな蟻、ね、凄くない？

女 変わった蟻もいるんですね

少女 その蟻の写真を見た時にね……なんてだろ、お母さんに似てるなって思ったの。顔もあんまり覚えてないのにね。なんだろうね、でも、なんだか虫っぽい感じの目をしていたのはよく覚えてるんだあ。思い出したくもないけど。お母さん

女 ……

少女 サムライアリの女王蟻はね。他の蟻の巣を襲って、その女王蟻を食べちゃうの。

ちようどこんな、暑い夏の日にするんだって。それでね、女王蟻を食べたサムライア리를、他の蟻は女王蟻だって思っちゃうんだって。女王蟻のね、フェロモンを食べた時に取り込むから。それで、他の蟻たちを奴隷にしちゃうの。怖いよね

女 怖いですね

少女 先生の顔も、蟻みたい

女 (笑って) だから、甘いものが好きなのかもしれませんね

少女 ……

女は再び、チョコレートを取り出す。包装を解いて、少女の口元に差し出す。

女 他の先生には内緒ですよ

少女　だからいらないうて
女　でも、チョコレート、好きでしたよね
少女　好きじゃない！

少女は女の手を振り払う。差し出されたチョコレートは地面にあっけなく、落ちる。

女　…

少女　…

女は地面に落ちたチョコレートをただじっと見つめるだろう。

唐突に、

女　海ちゃんは優しいですね

少女　は？

女　　蟻さんにあげたんですね

少女　…

少女は無言で、地面を何度も踏みつける。チョコレートに群がる蟻を何度も何度も、踏みにじる。

女 ……海ちゃん

少女 なに

女 やめなさい

少女 は？

女 やめてください

少女 なんて？ 蟻殺しちゃいけないの？

女 蟻が死んじゃうのは悲しいです

少女 そう

女 ……

少女 ……

女 でもね、私、蟻で済むなら、それでいいとは思っています

少女 は？

女 蟻で済むなら、悲しいけど、それでいいと思います。でもね、エスカレートする

かもしれませんか。蟻の次は、テントウムシ、ダンゴムシ、ゴキブリ、ネズミ

ってエスカレートするかもしれないから。ネズミの次は、例えばウサギとか

少女 ……

女 ううん。私ね、やっぱり悲しいですけど、そこで済むなら止めません。テント
ウムシで済むなら、ダンゴムシで済むなら、ゴキブリで済むなら、ネズミで済む
なら……ウサギで済むなら。私、何も言いません

少女 先生、何が言いたいの？

女 何か言いたいように聞こえますか？

少女 聞こえるね

女 この前ね、海ちゃんのお父さんから電話があったんです。海ちゃんが先週の夜、
こっそりと家を抜け出してどこかに行っていたみたいだって。お父さん、とても
心配されてましたよ。たった一人のお父さんに心配かけるのはよくないです
少女 だから何が言いたいの

女 先生が言いたいののは、先生は海ちゃんの味方だってことだけですよ？

少女 ……

女 ……

女 は再び、チョコレートに差し出す。

女 甘いものを食べると、心も落ち着きますよ？

少女 ……

女 好きでしたよね、チョコレート

少女 ……私さ、本当にチョコ苦手なんだよね

女 え、

少女 クラスのみんなが知ってる。私がね、チョコが好きだって勘違いしてるのお父さんだけなの。一回、なんとなく嘘ついたの。お土産で買ってきてくれたから、喜んだ方がいいかなって。嘘ついたの。そしたら、好きだって勘違いしちゃったみたいで、何かあるたびにチョコ買うようになって。ねえ、私がチョコレート好きなんて誰に聞いたの。いつ聞いたの？

女 ……

少女 先週の夜はね、確かに私、家にいなかったよ。でもね、こっさりじゃないよ。お父さんが、夜中まで帰ってこなかったから、堂々と家を出たの。それでお父さん、家に帰ってきて、私がいなかったから、あわてて電話したんだ。先生に。へえ。電話したんだ先生に。先生の電話番号なんてふつう知っているものなの？ ……教師の仕事をしていると、保護者の方と連絡を取り合うこともあります。海ちゃんのお父さんだけじゃありません。特にその…海ちゃんの場合は、その…お母さんのこともあるから、色々と連絡をとることはありましたお父さんに。携帯の番号も交換してました。何か緊急事態があったときに、お仕事で家を出ていることも多いだろうからと。でも、それだけですよ

少女 へえ

女 はい

少女 へえ

少女 それで、海ちゃんは、先週の夜、家を抜け出して何をやっていたんですか？

少女 知りたい？

少女 はい

少女 じゃあ、私の質問に答えてくれたら教えてあげる

少女 何ですか？

少女 ……先生はさっきの時間、何していたの？

少女 さっきの時間ですか？

少女 音楽は川崎先生だから、空き時間でしょ？ 何してたの？ ここで

少女 ……

少女 ……校舎からは体育館が影になって見えないけど、音楽室は五階だからさ、少し

だけ見えるんだよ。知ってた？ ねえ先生、さっきの時間、犬養先生と何してた

の？

少女 ……

少女 私は、お父さんのタバコの匂い嫌いじゃなかったんだけど

少女 ……

少女 私は、お父さんのタバコの匂い嫌いじゃなかったんだけどな

しばらくの間。

二人の、年齢の大きく離れた女が見つめ合っている。
ふいに、

女 ……このタバコですか？

女がカバンからタバコとライターを取り出す。

使い古された、シンプルな意匠のオイルライターだ。

女 お父さんからね、頼まれたんです。預かってくれて。手元にあると意思が揺らぎそうだからって。いいお父さんですね。ご自身からそうおっしゃったんです
よ？

少女 ……

女 吸ってみますか？

少女 は？

女 好きなんでしょう？

少女 ……

女 タバコの匂いが

少女 ……なに？ 試してるつもり？

女 (笑って) 他の先生には内緒ですよ？

彼女は一本タバコを取り出し、少女の口にくわえさせる。風で消えないように、慎重に、オイルライターに火をつける。

女　　そういえばお父さんこんなことも言っていましたね。海ちゃんがこのライターが好きだって。このライターで蟻さんに火をつけたんですか？

少女　　………

女　　火遊びは駄目ですよ？　でもほら、今は先生がつけてあげますから……大丈夫

女は少女の口元のタバコに火を近づける。

女　　ほら、ゆっくりと、息を吸って？

少女は思わずタバコを吐き出す。

そのタバコを何度も何度も踏みつける。

女はそれを見ている。

——と、

女は少女を慈しむように、力強く、しかし優しく、抱きしめる。

女 偉いです！ 海ちゃん！ よく自分からタバコを退けられましたね！
少女 ……

女 タバコってほら、フィクションの世界だとかっこよく描かれがちでしょう？ 先生ね、あれが良くないと思うんです。ああいうのに憧れて、みんなタバコを吸い始めてしまうんじゃないかって。でも、タバコはいけませんよ？ タバコの煙はね……毒ですから。海ちゃんの体にね、良くないですから。息抜きなら甘いものにしましょうね？ チョコが苦手ならほら……例えば飴玉とか。あ、紅茶もまだありますよ？ 紅茶なら大丈夫ですか？

女 がベンチに腰掛ける。また、水筒を取り出す。コップにミルクティーを注ぎ、少女に差し出す。

女 ほら……一緒に座って飲みませんか？ ミルクティー

少女 ……

少女は答ええない。差し出されたコップにも手を付けない。やがて、

少女 ……先生は何がしたいの？

女 ……何が？

少女 どうしてこんなことしているの？ お父さんと、イヌちゃんと、教頭先生も？
ほんとにはもっというの？

間。

しばらくの間。

女は差し出していたミルクティーを自分で飲む。

チョコレートもさらに一欠片頬張る。

女 うん。美味しいです。いい天気で、気持ちがいいです。外で、食事するのって楽しいですよ。特に、こんな素敵な場所ですと

少女 ……

女 ねえ海ちゃん。知ってました？ ここね、昔は喫煙所だったんですよ？ 海ちゃん、まだこの学校に入るずっと前の話ですけど

少女 ……へえ

女 だからここでタバコを吸う人がいたんでしょうね。私はどうかと思ったんですけどね。子供たちのいる学校でタバコを吸うなんて…健康に悪いですからねタバコは。勿論、先生方が吸うのは自己責任ですけど。でも、煙がね、汚してしまうでしょう？ 子供たちが吸う空気を

少女 ……

女 まあ、もういなくなりましたけど。教頭先生がね、頑張ってくれましたから
少女 ……

女 はチョコレートを食べている。

女 犬養先生って、海ちゃんから見てどうですか？

少女 は？

女 どんなイメージがありますか？

少女 ……人気のある先生だと思うけど、面白いし

女 そうですか

少女 怒ると凄い怖いけど

女 そうですね

少女 ……

女 犬養先生もね、大変なんです。生徒指導の仕事もされていきますから。優しい先生
なんてですけどね。指導の時はどうしても、怒鳴ることもあるし……それにほら、
手をあげてしまうこともあるでしょう？ 生徒に。勿論、ほんの少し、はたくく
らいですけど……でも私、やっぱり体罰はいけないと思うんです。どんな理由が
あってもね、体罰だけはね。駄目だと思うんです

少女 ……

女 さっきの時間、犬養先生にはね、そのお願いをしていただけですよ。もうね、生徒に手をあげることだけはしないでくださいねって

少女 ……

女 お願いをね……してたんのです

女はチョコレートを食べている。

女 最近、お父さんが仕事から帰ってくるの早くなりました？

少女 ……は？

女 お休みの日も、海ちゃんと遊んでくれることが多くなりませんでした？ あ、確か来週はプールに行くですよ？ ごめんなさい、再来週ですっけ。お父さんから聞きましたよ

少女 ……

女 お父さんにもね。お願いをしたんです。海ちゃんがね、寂しそうだったから

少女 ……何が言いたいの？

女 何が？

少女 私、お母さんなんて欲しくないんだけど

少女の言葉に、女は少しだけ驚いたように目を開く。

そして、急に、声を出して笑う。

女 (優しく) 海ちゃん。……先生はね、先生ですよ？ 海ちゃんにとって、みんな

にとつて、良い先生になりたいんです

少女 ……

女 だからね、理由だけ知りたいです

少女 ……

女 理由だけ教えてくれたら、それで、いいですよ

少女 ……

女 ……

少女 理由は……警告だと思っけど

女 警告？

少女 私ね、先生のこと大嫌いだけど、別にね、どうでもいいの、他のことはね……他

のことは別にどうでもいいの……多分ね、良い生徒のふりもできると思うよ、き

っとね。でもお父さんだけはやめてね

女 ……

少女 お父さんだけ放っておいてくれたら、私はもういいから

女 そうですか

少女 ……シロちゃんのこと、本当に好きだったんだあ

女 はい

少女 でももっと大好きなものだって、私、できるよ、友達でも
女 ……

少女 ……私、自身でも

女 ……海ちゃんの気持ちはよく、分かりました

少女 ……そう

女 よく、分かりましたから

少女 うん

女 はい

チャイムの音が鳴る。

女 授業終わっちゃいましたね

少女 うん

女 次は国語です。出席してくれますか？

少女 ……いいけど

女 ありがとうございます

間。

しばらくの間。
ふと、少女が地面に目を向ける。

少女 さっきのチョコ

女 はい

少女 蟻が群がってるね

女 そうですね

少女 先生みたい

女 ……蟻がですか？

少女 ……そう思ってただけど。…今は、チョコの方が先生みたいに見える

女 へえ

少女 そのうちなんにもなくなっちゃうね

女 そうですねえ

少女 ……

女 そうなりたいのかもしれないね

少女 は？

女 私もね、嫌いですよ？

二人は見つめあっている。

女 海ちゃんと一緒にです。私も嫌いですよ。人を嫌いになれないなんて言う人

少女 ……ねえ先生

女 なんですか？

少女 本当に蟻殺したことないの？

女 ないですよ？

少女 そう

女 はい

少女 ……信じるよ

女 ……

少女 信じてあげる。先生が蟻殺したことないって

女 ……

少女はそれだけ告げて、その場を去る。

舞台には女が一人、取り残される。

女 ……

彼女は地面に落ちたチョコレートをじっと見つめている。

チヨコレートには蟻が群がり、少しずつ少しずつ蝕まれている。
彼女はそれをじっと見ている。

女
………

ただじっと、
じっと、
見つめている。

蟻を殺す
幕